

2024年5月総評 暮田真名

持ち合わせた宇宙がなくて

へんなところに

しわをつくって、

笑う

/ こはくいろ

「読みの正解」を探そうとすると非常にむずかしい詩だが、目を離すことができなかった。「へんなところにしわをつくって、笑う」とはえくぼのことだろうか。「しわ」から生まれる布の連想をとりわけ不思議な一行目にも広げると、テーブルクロス引きのように宇宙が消えていくところがみえて楽しいかもしれない。

シャー芯を押しても

出ないみたいにさ、

言葉は出なくなっちゃうのよね。

/ うたた

シャープペンシルの芯が出ないのは、芯が入っていないときだけではない。芯を詰めすぎたためにかえて出なくなってしまうこともある。言葉が出てこないという事態を見つめ、「シャー芯」という比喻を掴み取った点を評価した。「(芯の / 空気の) 通り道」として、シャープペンの軸と人間の喉が重なりあう。

金閣が燃えているのに鼻づまり

/ 土居尚子

それだけで小説が一冊書けてしまうほどの事件である金閣寺の消失を持ち出してきておきながら「鼻づまり」という卑近な身体感覚に強引に着地してしまう、これが短詩だと思った。「のに」という接続詞で本当は何の関係もない二つの出来事に強引に因果関係を作り出してしまふ、これが短詩だと思った。

脱色の眉光らせて家を出る

私が夏のいいなづけ

/ 鈴木たなか

前髪を上げ、脱色をした眉を光らせるという動作からはみなぎる自信が伝わってくる。そのうえ、婚約をした相手が「夏」であるというのは、他人を寄せ付けない気高さを表しているようでもある。自然をも相手どった全能感のある表現に魅力を感じた。

われわれの声帯模写をする羊

/ 高田皓輔

人は無邪気に動物のものまねをするけれど、その逆を考えるとゾッとする。この生理的な忌避感によって、自分がどれだけ人間であることに驕り高ぶっているかを突きつけられる。この句において、「われわれ」とはまぎれもなく人類のことなのだと思う。

おばけだよ

点滅しているよ

嘎れたついでだ

きもちよさそうに

蒸発しているよ

/ 鯖詰伍太郎

「点滅」「嘎れる」「蒸発」という、あるとないの間を行ったり来たりするおばけに似た動詞が並ぶ詩。「かれる」は「枯れる」「涸れる」と書く場合もあるけれど、「嘎れる」という字によって声のイメージが喚起される。おばけなのにおどろおどろしさがなく、爽やかなところが良い。

夕永くほぼ幸福な窓の数

/ 田崎森太

幸福度を測る指標は数あれど、「窓の数」がそれになったことはないのではないか。しかし不思議と納得感がある（もちろん、家の広さなどという即物的な話ではなく）。窓があるから家は光を取り込むこともできるし、風を通すこともできる。筆者は「ほぼ幸福」であると感じている。素晴らしいことだと思う。

ナベシャツを風は通らず熱帯魚

/ 日下部友奏

熱帯魚を日本で見るとき、その魚は生まれた場所から遠く離れて、本来いるはずのない気候の土地で生きていることになる（だから飼おうとするとなにかと設備が必要）。よそものであること。身体への違和感を表す「ナベシャツ」と「熱帯魚」はその一点において共鳴しあっている。

まっしろいロールケーキに

倒れこむときだけみえる

教会がある

/ 折原

「ロールケーキに倒れこむ」という表現から立ち上がる、クリスマスケーキに乗った砂糖菓子のサンタのようなミニチュア感。身体があの大さきならロールケーキでも雪原のように感じられるだろう。どことなく身投げのような雰囲気もあり、「教会」のまぼろしに説得力が生まれている。

数学と別れて水羊羹を切る

/ azusa

「別れる」と「切る」、似た意味の動詞が並ぶ。「数学」と「水羊羹」の取り合わせからは『ケーキの切れない非行少年たち』的な学力とお菓子をとり分けることとの結びつきが連想されるけれど、水羊羹を切るのはケーキを切るよりも難しそうだ。「数学と別れて」という言い方に味がある。